

研究主題「生活科の活動や体験を通して、
気付いたことを基に考えを深める児童の育成
—多様な学習活動と表現活動の具体的な児童の姿を想定した
単元計画を通して—」

東京都教職員研修センター 研修部 専門教育向上課
杉並区立杉並第二小学校 主任教諭 隅田 純子

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領解説生活編（平成29年7月）（以下「解説生活編」とする。）において、資質・能力を育てるためには、「単に思いや願いを実現する体験活動を充実させるだけではなく、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動とが豊かに行き来する相互作用を重視するなど、気付きの質を高めることを意識することが大切である。」と示されている。

しかし、生活科の授業において児童のより質の高い気付きを得ることにつながる教師による授業展開や手だてが十分に行われていない現状が見られる。そこで、児童の気付きの質を高めるためには、体験活動に表現活動を適切に位置付けた学習活動をより意識して設定することが重要であると考えた。このような学習活動にするためには、「見付ける」、「比べる」、「たとえる」、「試す」、「見通す」、「工夫する」というような多様な学習活動と表現活動とが豊かに行き来するように単元計画を見直し、具体的に多様な学習活動と表現活動を設定する必要がある。

本研究では、活動や体験における多様な学習活動や表現活動での具体的な児童の姿を想定した単元計画を作成し、教師が手だてを考え、実践していくことで、児童のより質の高い気付きの実現を目指していく。

第2 研究仮説

生活科において、多様な学習活動と表現活動を教師が意図的に設定すれば、児童が気付いたことを基に考えを深めることができ、気付きの質がより高まるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

- (1) 「解説生活編」における「多様な学習活動と表現活動」及び「気付きの質」に関する記述を整理し、活動における具体的な児童の姿を明らかにした。
- (2) 「生活科の気付きの質を高める授業実践」及び「生活科の気付きの質に関する理論」に関する先行研究の調査から、教員の指導の実態を見直した。

2 開発研究

(1) 生活科単元計画作成リーフレット

生活科の学習において、深い学びの姿を実現する「見付ける」、「比べる」、「たとえる」、「試す」、「見通す」、「工夫する」などの多様な学習活動と表現活動を位置付けた単元計画を作成するために、「より質の高い気付きを目指した学習活動モデル」、「児童の多様な学習活動・表現活動表」をまとめ、「生活科単元計画作成リーフレット」（図1）を作成した。

ア 「より質の高い気付きを目指した学習活動モデル」（図1 左側）

児童のより質の高い気付きを目指すことができるように、生活科における多様な学習活

動と表現活動の具体例を図に示した。表現活動を図の中心に置き、一つ一つの多様な学習活動と関連していることをイメージできるようにした。

イ 「児童の多様な学習活動・表現活動表【例】」(図1 右側)

教師が単元における具体的な児童の姿を設定することができるよう「より質の高い気付きを目指した学習活動モデル」を表にした。この表は、「解説生活編」の「内容(6)自然や物を使った遊び」に基づき、単元「つくる 楽しさ はっけん」の「児童の多様な学習活動・表現活動表」の例である。

ウ 生活科単元計画作成リーフレットの活用方法

児童の実態や学校・地域の状況に合わせ、単元計画の見直しを行う。その際、単元における多様な学習活動や表現活動を行っている具体的な児童の姿を、「児童の多様な学習活動・表現活動表【例】」(図1 右側)のように、単元の内容に合わせて学習活動を設定していく。

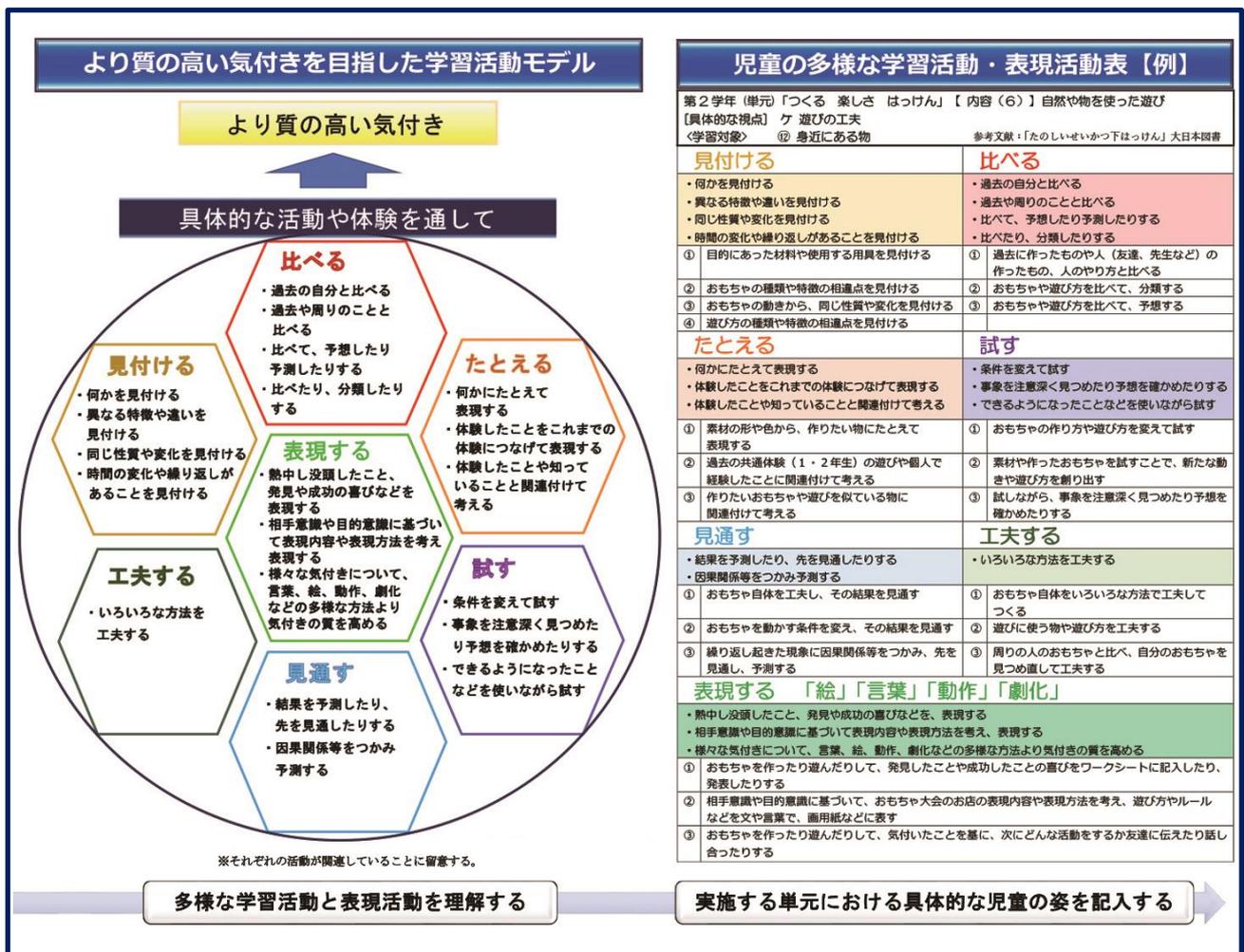


図1 生活科単元計画作成リーフレット

エ 具体的な指導の手だての設定

設定した学習活動をイメージし、必要な手だてを検討していく。例えば、「様々な場の設定」として、リサイクルおもちゃの本を複数準備し、児童が自由に読めるように「くらべるコーナー」に設置したことで、「比べる」、「試す」学習活動を指導の手だてに位置付けた(表1)。留意点として、手だてを設定する際には、単元全体の学習活動を整理し、連続性や関連性を踏まえて適切に位置付ける必要がある。

「生活科の活動や体験を通して、気付いたことを基に考えを深める児童の育成
 -多様な学習活動と表現活動の具体的な児童の姿を想定した単元計画を通して-

表 1 具体的な指導の手だて

指導の手だて		具体的な内容
ア 様々な場の設定 (7)くらべるコーナー	比べる、試す	グループで作ったおもちゃや遊びを比べたり試したりできるように、スタートラインやゴールラインを作った。児童は、形状、長さなどを比べることができるようにした。
ア 様々な場の設定 (i)みつけるコーナー	見付ける、比べる	みつけるコーナーでは、リサイクルおもちゃの本を置き、おもちゃの作り方を調べられる場所を作った。
イ ワークシートの工夫	見付ける、比べる、 たとえる、試す、見通す 工夫する、表現する	多様な学習活動を意識して記入できるように、提示物やワークシートに活動事例を提示し、それを毎時間児童に示した。また、同じ視点でワークシートを、時系列で並べられるようにすることで、思考を可視化したり、児童の過去と現在の記述を比較したりできるようにした。
ウ 質的・量的な材料の準備	見付ける、試す	児童がおもちゃを作り遊ぶ姿を想定し、様々な形状、大きさや、材質が異なる材料、材料を切ったりつないだりする用具等を数多く用意した。また、自然の面白さや不思議さに気付くおもちゃにつなげられるよう磁石やゴム、遊びに使ううちわ等も意図的に用意した。
エ 学びの形態の設定	見付ける、比べる、試す 工夫する、表現する	(7) 個人 (i) 数人 (j) グループ (x) 全体 (y) お店 学習を重ねるごとに児童の発想が広げられるように、活動に応じて学ぶ形態を設定した。

3 検証授業

検証授業は、都内公立小学校第2学年の児童31名対象に実施した。第2学年 単元「つくる楽しさ はっけん」(内容(6)自然や物を使った遊び)の単元指導計画を以下に示した(表2)。

表 2 単元「つくる楽しさ はっけん」の単元指導計画

時間	小単元	活動内容	検証する指導の手だて ※表1参照
第1時	おもちゃを作ってみよう	身近にあるものを使い、おもちゃを作る。	ウ、エ(7)(x)
第2時 第3時		試行錯誤しながら自分の作りたいおもちゃにしていく。	イ、ウ、エ(x)
第4時 第5時	楽しさのひみつはっけん①	友達とおもちゃで遊びながら工夫し、楽しいおもちゃにしていく。	ア(7)(i)、ウ、エ(i)
第6時	楽しさのひみつはっけん②	おもちゃを作ることを通して、気付いたことを発表する。	イ、エ(x)
第7時 第8時		おもちゃや遊びの工夫を通して、楽しいお店にしていく。 お店の模擬体験を行い、友達にアドバイスをする。	ア(7)(i)、イ、エ(y)
第9時 第10時		前時で受けた友達からのアドバイスを基に遊びや遊び方の工夫をしていく。	ア(7)(i)、イ、エ(y)(z)

(1) 検証の内容

児童の具体的な気付きとその変化の様子から「児童の多様な学習活動・表現活動表」を基に設定した学習活動と手だての有効性を検証した。児童の気付きの質については、発言、つぶやき、ワークシートから行った。また、効果の検証のために、児童の「気付きの段階」(図2)を作成し、児童の気付きの質を「1気付き」、「2新たな気付き」、「3より質の高い気付き」の3段階に分けて、考察を行った。さらに、検証授業後、児童に対して挙手による意識調査を行った。

気付きの段階		気付きの状態
3	より質の高い気付き	◆試す、見通す、工夫するなどの学習活動を行うことで、より質の高い気付きを生み出している ◆考えることを繰り返し、気付きを自覚し確かなものとしている ◆結果を予測したり、先を見通したりしながら多様な学習活動へと発展させている
2	新たな気付き	◆一つ一つの気付きを関連付けている ◆違いを見付け出し、改良しようと試行錯誤している
1	気付き	◆一人一人の認識(気付き)

図 2 気付きの段階

(2) 検証の結果と考察 ※ [] 内の記号は、表1参照

ア 結果

(7) 学級全体から

- ① 多様な学習活動と表現活動について意識しながら活動ができていた児童の割合は、全体の93.0%であった。〔イ〕
- ② 多くの材料から必要な材料を吟味し、作りたいおもちゃに近付けるために何度も比べたり、試したりしながら作る姿が多く見られた。〔ウ〕
- ③ 新たな作り方を知るために、みつけるコーナーの本を活用して違いを見付け出し、おもちゃの改善に向けて工夫する姿が見られた。〔ア(イ)〕

(1) 検証対象児から

- ① 作った車を友達同士で車の速さの性能を比べていた。風輪に、風を受ける部分をつけ、よく回るように工夫した過去の経験と関連付け、友達に帆の大きさについてアドバイスしていた。〔ア(ア)、エ(ウ)〕
- ② 2個の磁石で指を上下に挟むと、下の磁石が落ちない現象を見て、磁石は間に物を挟んでも引き合うことに気付き、箱の下から磁石を挟んで上の物を動かせることを見通し、従来にないおもちゃに工夫する姿が見られた。〔イ、エ(イ)〕
- ③ 魚釣りのおもちゃで、一度に多くの魚が釣れてしまう原因は、魚につけた磁石が強いということに気付き、磁石が離れる方法を考えた。〔イ、ウ〕磁石のついた魚と魚の間に、磁石のついていないわかめを入れると、障害物が多くなり磁石同士がつかないことに気付き、磁石のついていないわかめの数量を試しながら調整し、遊びの難易度を工夫していた。〔イ、エ(イ)〕

イ 考察

単元を通して、自分の思い通りのおもちゃを作るために、多様な学習活動と表現活動を行き来しながら活動していた児童がいた。その要因として、3点の手だてが有効であったと考える。1点目は、ワークシートに多様な学習活動と表現活動の文例を示したことである。毎時間必要な学習活動を児童に意識させることで、試行錯誤する活動につながった。2点目は、思いや願いを実現させるために、豊富な材料や用具を準備したことである。使いたいと思うものがすぐに使える状態にすることで、児童は活動に没頭し、試行錯誤を重ねながら気付きの質を高めていったと言える。3点目は、学びの形態を意図的に変化させたことである。児童の気付きを共有することで、新たな児童の気付きが生じ、より質の高い気付きへと深い学びをしていく児童同士の姿が見られた。

第4 研究の成果

「児童の多様な学習活動と表現活動表」を活用することで「解説生活編」に示された児童の姿を具体的に想定することができた。また、そのことで、教師がその活動に最も対応すると思われる手だてを講じることにより、児童が得られた気付きを質的に高めることができた。

第5 今後の課題

教師が「児童の多様な学習活動・表現活動表」を基に単元計画を作成する際、それぞれの学習活動に手だてが生じるため、学級の実態に応じて手だてを整理することが必要である。また、一人一人の児童の気付きの質の高まりを適切に評価するため、評価の計画を再検討し、評価の場面を精選する必要がある。